

《2019年度 ICD 日本部会・総会・認証式特別講演》

日本文化に刻み込まれた「身体ことば」という宝物



山梨学院大学 国際リベラルアーツ学部 教授

ウィリアム・リード

●抄 録●

日本語には英語に置き換えられない単語が数多く存在します。その一つが「身体ことば」です。歯切れがいい、ヘソが曲がる、目が無い、手当て、口が滑るなどなど。あつという間に10や20の身体ことばをあげることができます。また擬声語や擬態語も多くの外国人が日本語を学ぼうとする時に立ちはだかる壁です。スヤスヤ寝てる。なぜスヤスヤなのか、説明できますか。しかしこの身体言葉や感覚言葉こそが日本文化の独自性といってもいいと思います。日本文化には、身体ことばを含めて人間の能力や情緒を育てる素晴らしいものが沢山あるのです。

キーワード：身体ことば、感覚ことば、擬声語、擬態語、体感覚

私は合気道がキッカケで、47年前に留学生として来日しました。来日以来「道」というものを追求し続けてほぼ半世紀が過ぎて、今は教える立場になっています。

今日のテーマは『日本文化に刻み込まれた「身体ことば」という宝物』です。日本に初めて来たときは、日本語はゼロですから（日本語という海で）溺れながらどうやって泳ぎ続けるのか必死に学びました。ここで面白い本をご紹介します。[からだことば辞典]です。こんなに分厚い辞典です。「手」がつく言葉とか、「目」がつく言葉とか、舌が回る、ヘソが曲がる、目に入れても痛くないとか、そういう言葉がこんなに沢山あるんです。例えば、口がうまい、口が軽い、口が堅い、口が過ぎる、口がすべる、口が減らない、口が悪いなどなど。歯も沢山あります。歯切れがいい、歯が浮く、歯が立たない、など沢山あるのですが英語に訳せません。ほとんど説明になってしまいます。では「手」がつく言葉がどのくらいあると思いますか？ どのくらい書けますか？ 選手、相手、

大手、投手、手続き、若手などなど、日本語は「手」のつく言葉が特に多く1,000以上あります。これに対応する英語は「Hand」がほとんど使われません。単語ではなく説明になるんです。日本人は手先が器用です。手仕事の文化です。皆さんも、ある意味で手仕事ですね。頭の刺激にもなるし、その器用さがものすごく大事なんです。ところがNYタイムズの記事によると、若い整形外科医がだんだん不器用になっているというんですね。昔なら当たり前でできた手術ができなくなっている。それはどうしてなのか研究されているのですが、子供の頃に手を使って遊んでいないんですね。ゲームとかスマホばかりで、せいぜい親指とそれ以外の指を動かす程度で細かい作業をやっていないんですね。それを20代で学ぼうとすると大変苦労します。

日本には「からだことば辞典」の他に「あめのことば辞典」もあります。これはもっと英語にならないんです。例えば「雨だれ調子」。これはピアノを習い始めた時にポツン、ポツンと弾く様子です。英語

に（その単語）はありません。説明はできますよ。それからオノマトペ。擬声語・擬態語です。これこそ英語にならないんです。どうして目がキョロキョロするのか？なぜそれをキョロキョロというのか？キラキラとキラキラの違い。褒め言葉として間違えて使うと大変なことになります。スヤスヤ寝てる。なぜスヤスヤなのか、説明できますか？外国人はみんなこれに困っているんです。日本人は感覚でその様子を表現しているんですね。こういう表現が日本語には沢山あります。それから自然界は日本語で話しかけてくれると私は思っています。アメリカでは、自然界はそういう風に話しかけてきません。それが日本語のひとつの特徴でとても面白いのです。身体で共振しているのです。私が教えている大学では30数ヶ国から留学生が来ているのですが、どうやってこの感覚を教えるのかという「書」を通じて教えます。線には生きている線

と、死んでいる線があること。また細くても途切れず気脈というものがあることを伝えます。例えば、バイオリンの演奏を聴いてもらうことで実感してもらい、音質と同じで線質があることを伝えています。そういう感覚が体感できると、十数時間で見事な文字が書けるようになります。記憶術に関しては、漢字を単に記憶するだけでなく、五感をフルに使って連想し分解して関連づけることと、それを使ってインプットとアウトプットをすることで忘れずに記憶することができます。初めに言語の壁を越える体験をすることが大切です。そういう体験を通じて日本に興味を持ってもらいたいと思っています。日本文化には、からだことばも含めて人間の能力や情緒を育てる素晴らしいものが沢山あります。AIやロボットの時代に負けないようにますますそれを大切にしていきたいと思います。

Hidden Treasures of Japanese Culture in Body-Conscious Language

Professor, International College of Liberal Arts (iCLA), Yamanashi Gakuin University

WILLIAM REED

There are many words in the Japanese language which do not easily translate into English. One such category of words is known as *karada-kotoba*, literally *body-words*. Literal translations make no sense in English, and although they refer to common human experiences, they are expressed quite differently in English. *Hagire ga ii* (well bitten) means brisk and lively speech; *heso ga magaru* (twisted navel) means perverse or contrary; *me ga nai* (no eyes for) means to have a weakness for; *teate* (hands on) means medical treatment or first aid; *kuchi ga suberu* (mouth slip) means slip of the tongue. Most Japanese can easily come up with 10 to 20 *karada-kotoba* without hesitation. Many onomatopoeia words in Japanese are difficult for non-Japanese to remember and understand. Why *suyasuya neteirū* means sleeping soundly, when there are thousands of other words that sound like *suyasuya*? Even native speakers are at a loss to explain. However there is something in these body-words and onomatopoeia feeling-words that expresses a unique character of Japanese culture, which provides the rich range of expressions for human sensibilities and feelings.

Key words : Body-words, Feeling-words, Onomatopoeia, Body-sense